食品安全委員会第83回会合議事録

1．日時 平成17年2月24日(木) 13:00～13:50

2．場所 委員会大会議室

3．議事

(1) 添加物専門調査会における審議状況について

・添加物「ナタマイシン」に関する意見・情報の募集について

(2) 遺伝子組換え食品等専門調査会における審議状況について

・遺伝子組換え食品「ラウンドアップ・レディー・アルファルファ」101系統、
ラウンドアップ・レディー・アルファルファ」163系統」に関する意見・情報
の募集について

(3) 平成17年度食品安全委員会運営計画について

(4) 食品安全モニターからの報告(平成17年1月分)について

(5) その他

4．出席者

(委員)

寺田委員長、小泉委員、坂本委員、寺尾委員、中村委員、本間委員、見上委員

(事務局)

齊藤事務局長、一色事務局次長、小木津総務課長、村上評価課長、藤本勸告広報課長、
杉浦情報・緊急時対応課長、西郷リスクコミュニケーション官、富澤評価調整官

5．配付資料

資料1 添加物専門調査会における審議状況について

資料2 遺伝子組換え食品等専門調査会における審議状況について

資料3 平成17年度食品安全委員会運営計画(案)

資料4 食品安全モニターからの報告(平成17年1月分)について

6 . 議事内容

寺田委員長 ただいまから「食品安全委員会」の第 83 回会合を開催いたします。本日は、7 名の委員全員御出席でございます。

会議のスケジュールにつきましては、お手元の資料に「食品安全委員会（第 83 回会合）議事次第」というのがございますので、御覧ください。

資料の確認をお願いいたします。

資料 1 が「添加物専門調査会における審議状況について」。

資料 2 が「遺伝子組換え食品等専門調査会における審議状況について」。

資料 3 が「平成 17 年度食品安全委員会運営計画（案）について」。

資料 4 が「食品安全モニターからの報告（平成 17 年 1 月分）について」であります。皆様お手元でございますね。

それでは、議題に入らせていただきます。「（1）添加物専門調査会における審議状況について」、事務局から説明をお願いいたします。

村上評価課長 それでは、資料 1 に基づきまして御説明をさせていただきます。今回お諮りをするものは、ナタマイシンという食品添加物でございます。

ナタマイシンにつきましては、1 枚めくっていただきまして、審議結果の（案）がそこから書いてございますけれども、ストレプトマイセス・ナタレンシスという細菌のつくる抗生物質でありまして、2 ページの真ん中に構造式が出ておりますけれども、比較的高分子の、このような形の抗生物質でございます。

チーズ表面に塗ることによりまして、チーズの表面に、予期しないと申しますか、チーズにとってよくないカビや酵母が発生するのを防ぐというものでありまして、これはヨーロッパ等で 50 年ほど前から使われているものでございます。

実際にどんなチーズにも塗っているというものではなくて、ゴーダチーズとか、ああいふ扁平な玉のような感じのチーズであって、チーズ表面にフィルムやその他で乾かないようにコーティングなり、きっちりとしたパッキングがされているものではなくて、チーズそのものが何もパッキングなしに流通することを前提としてつくられたチーズは、時間が経ちますとチーズ表面がだんだんかたくなってまいります。かたくなる前に表面に塗っておいて、流通の段階でかたくなってきた部分については、一般的には食用としないで削って、取って、中身だけ食べるというような使い方をされるものであります。

EU では、いろいろなチーズに対して表面処理用として使用が認められているものでありまして、1 ページの上から 4 行目辺りに書いてございますが、最大量で 1 mg / dm² とい

う量的な制限がございまして、かつ、5 mm の深さでは存在しないことというようなことになっております。

米国では、チーズへの使用を最終製品で 20 ppm 以下というようなことで認められているということでありまして、国際的な規格の中でもチーズ一般規格という規格がございまして、その中でもチーズ表面への使用が認められているものでございます。

本品につきましては、平成 15 年 10 月に厚生労働省より健康影響評価の依頼がございまして、添加物専門調査会では 3 回にわたって御審議をいただきまして、この審議結果の案をとりまとめたものでございます。

2 ページを御覧いただきますと、一番上に「3 添加物指定の概要」というところがございますが、各国の使用の状況等を勘案いたしまして、これは勿論、管理側で考えている使用の規制の案でございますけれども、ハード、セミハード・チーズに対してチーズの表面に一定量以下の濃度で塗布をする。あるいは、チーズの深さ 5 mm の部位で存在してはならないというような規定をつくろう。それを前提として、添加物として指定したいということについてどうかということが今回聞かれたわけでございます。

本品は、医薬品としても使用されておりました、我が国において、2 ページの 5 のところでございますが、ピマリシン。これは別名でございますが、外用剤として使われております。

現在、販売をされておりますのは角膜真菌症の治療薬ということで、外用剤、点眼剤、あるいは眼軟膏として用いられておりますが、このほかにも真菌症の治療の目的で外陰部に塗布をするための軟膏というものが、かつて医薬品として使用されておりました。それは経済的な理由によって今ではもう使われていないようではありますが、実は本品は医薬品分野でも使われているものというものでございます。

安全性に関する検討につきましては、本品について、急性毒性、短期毒性、長期毒性等の試験が行われております。

3 ページの下の段に「長期毒性」の記述がございまして、ラットを用いた試験も行われておりました、その下の段落ではビーグル犬を用いた試験も行われております。

ただ、ビーグル犬を用いた試験につきましては、試験中に感染症が見られているということがございますので、この試験結果を安全性評価に使うかどうかということでは、御議論がありました。

それから繁殖毒性、あるいは催奇形性等が行われておりますが、いずれも繁殖能への影響、あるいは催奇形性を示す所見は得られていないということでございます。

発がん性につきましても、ラットを用いた試験が行われておりまして、腫瘍の発生増加は見られなかったということになっております。

それから、遺伝毒性につきましても、幾つかの試験が行われておりますけれども、全体的な総合的な評価といたしましては、生態にとって特段問題となる遺伝毒性はないというのが専門調査会での御議論の結果でございました。

5ページの下から、ヒトにおいてナタマイシンを摂取した場合の影響が報告をされておりました、ナタマイシンを相当量投与されますと、悪心、嘔吐、下痢というものが発生をするという報告がございました。これは相当量摂取した場合でございます。

それから、本品につきましては、先ほど申しましたように、医療用でも同じ成分が使われているということもありまして、微生物の耐性に対する影響についても御議論をされたところでございます。

耐性につきましては、8ページの「7 国際機関等における評価」の上のところでございますが、ナタマイシンについては、そのほかのポリエンマクロライド系の医療用に使われている抗生物質の交差耐性について検討した結果、アムホテリシンB、あるいはナイスチンとは交差耐性を示さないんじゃないかという御結論でありまして、それからナタマイシンの使用によって真菌の耐性を選択することはまれであって、耐性が選択されとしても、問題になることはないだろう。医療現場で用いられている類薬との交差耐性については、医療上の問題となることはないだろうという御議論でございました。

7からは、国際機関における評価が書いてございますが、いずれにしても、同じような御議論、JECFAにおける評価、これはWHOの評価ですが、9ページの下の方にはEUの食品化学委員会における評価というのが(2)に書いてございまして、いずれにしても、本品について交差耐性のことも含めて評価をした結果といたしましては、EUの食品科学委員会の評価を御覧いただきますと、10ページの上から6行目辺りから、「以下のよう結論している」というところでございますが、1つは、ナタマイシンのヒト用医薬品についての使用は限られているが重要であるということで、本品は一般的に使用される添加物としてはよくないだろうと。

2番目は「好気性条件で熟成されたナチュラルチーズ(セミハード)全体のリンド」、これは表面のかたくなったところでございますが、リンドの処理としての使用、あるいは「市場に出る前に熟成が必要なある種のソーセージのケーシングへの使用は、以下の条件で受け入れられる」ということであります。それは表示をしなければならないということと、4では「治療用途の範囲が著しく拡大した場合には、この立場の見直しを行うべきで

ある」と、このような評価になっているわけでありませう。

専門調査会もこれらの外国における評価、あるいは添付された資料等を踏まえまして、評価をしていただいておりますが、11ページの9のところでございますが、評価結果としては「ナマイシンは消化管からはほとんど吸収されず、動物試験において認められた体重増加抑制を伴う摂餌量の低下は、本物質の難吸収性及び腸管での局所性の刺激に基づく下痢に起因するものと考えられる」ということでありまして、遺伝毒性はないと考えられ、発がん性も認められないということでございます。

それでは、ADIはどのように設定するかということも御議論いただきまして、ヒトについて、経口投与による臨床データが存在しているので、嘔吐、下痢が認められない濃度を基に、ADIを設定することが適用なのではないかという御結論になっているところがあります。

10ページをごらんいただきますと「欧州医薬品審査庁における評価」というのが(3)のところにあります。JECFAの国際機関での評価は、同様にヒトを用いた、ヒトの臨床試験成績に基づく安全性評価を行っておりますが、欧州医薬品審査庁ではイヌの2年間の反復投与毒性試験の結果から、ADIの設定をしております。このことも含めて御議論をされたわけでありませうけれども、明らかに飼育環境上の問題が認められるので、イヌを用いた90日間及び2年間反復投与試験は評価には用いないという御結論になりました。

ウサギを用いた催奇形性試験において見られた所見については、催奇形性を示す所見ではないということと、ウサギの腸管への影響の感受性が高いということも考慮して、これもADIを設定する根拠としては適当ではないということになりまして、これはJECFAの評価と同じになるわけでございますけれども、ヒトに対する影響を基に、ヒト1人が1日200mgを経口で摂取しても、消化管への影響はなかったということから、ADIを安全係数10を取りまして、0.3mg/Kg体重/日にするのが適当という評価になっております。追加的に交差耐性についても評価も11ページの最後の段落から12ページにかけて行われてありまして、結論といたしましては、ナイマイシンの医薬品としての使用範囲は限られているけれども、その重要性を考慮して無制限に広く食品に使用される添加物としては受け入れられないという御意見でございますが、ただ、抗真菌作用を目的として特定食品、ここではチーズであります。チーズの最終製品の表面処理のみに限定し、適切に使用される場合にあっては、耐性菌出現による医療上の問題を生じる可能性は極めて少ないと考えられるという評価になっております。

なお、新たな知見が得られた場合には、必要に応じて再評価を検討する必要があると考

えるというのが添加物専門調査会での審議結果の案でございます、本日もしお許しいただければ、本日より意見・情報の募集に入らせていただきたいと考えているところでございます。

よろしく願いをいたします。

寺田委員長 ただいまのナタマイシンの説明に関しまして、何か質問事項とか意見ございますでしょうか。

よろしいですか。

それでは、本件につきまして、意見・情報の募集手続に入るようお願いいたします。続きまして、遺伝子組換え食品等専門調査会における審議状況についてお願いいたします。

村上評価課長 それでは、資料2に基づきまして、御説明をさせていただきます。

今回お諮りをいたしますのは、ラウンドアップ・レディー・アルファルファ J101 とラウンドアップ・レディー・アルファルファ J163 という2つのアルファルファ、遺伝子組換えアルファルファについての食品健康影響評価でございます。

本品につきましては、1枚めくっていただきますと、審議結果の(案)が出ております。

ラウンドアップ・レディーというのは、日本モンサントが申請をしておりますラウンドアップという除草剤への耐性を付与した作物に対して一般的に使用されている名称でありまして、今回はアルファルファであるというわけではありますが、このほかにも同じように除草剤耐性を付与した農作物というのは既に評価をさせていただいているところであります。

つい先日お諮りをしたワタ MON88913 というのがございましたが、これも同じ除草剤耐性を付与したものでありまして、除草剤耐性を付与するやり方というのは、ラウンドアップという除草剤は植物の通常の代謝の酵素の1つを阻害するものでありまして、1ページの真ん中辺りに評価対象食品の概要の3行目辺りに書いてありますけれども、5-エノールピルビルシキミ酸-3-リン酸合成酵素、これが EPSPS という酵素でありますけれども、これが通常のワイルドタイプでありますと、グリホサートという除草剤に対して感受性があり、グリホサートが存在すると働かなくなるというわけではありますが、これを *Agrobacterium* が持っているグリホサートによって阻害されない酵素と置き換えることによって耐性を付与するという仕組みでございます。

今回のアルファルファにつきましては、食用としては、若い芽をサラダで食べる、あるいは健康食品の素材として使われるということで食品用のものとして評価を求められたものであります。

食品健康影響評価でございますが、これは最初はまず既存のアルファルファと比較する

ことができるかということを書いてあるわけですが、評価をしたわけでありませ
けれども、これについてはできるだろうということになっております。

3 ページ以降、詳細項目について安全性評価が行われておりまして、1 つは組換え体
の利用目的、利用方法が特に変わったものとなっていないか。あるいは宿主に関する情報に
ついてどうか。宿主がもともと持っている有害生理活性物質はあるのかないのか。あった
場合、これ以降の評価の中で、そういうものが増幅されることはないかということが評価
をされているわけでありませ。

4 ページにはベクターに関する事項、あるいは挿入 DNA、遺伝子産物、並びに発現物
質の構築に関する事項ということが評価をされておりまして、先ほど申し上げたように、
今回のアルファルファの J101、J163 いずれも既に評価済みのトウモロコシなりワタなり
に挿入をされている遺伝子と同じものを導入をされているというものでございませ。

5 ページの後段には発現ベクター、実際に遺伝子組換えを行うときに使用したベクター
に対して評価をされているところございませ、6 ページからは組換え体に関する事項
ということで、その遺伝子導入をした結果として、本当に改変 DNA と申しますか、耐性
の EPSPS 遺伝子がきちんと入っているか。完全な 1 コピーだけが入っているかどうかとい
うことを、近傍配列も含めて評価をしているところでありませ。

6 ページの(2)では、オープンリーディングフレーム、目的以外のタンパク質を発現
する可能性のある、導入されてしまった塩基配列はないかどうかということが評価をされ
ているところございませ。

7 ページ、遺伝子産物について、アレルギー誘発性があるかないかということの評価を
してございませ、これは先行する同じ遺伝子を導入した作物等を勘案いたしまして、特に問
題となるようなタンパク質は入ってこないだろうということが確認をされているところ
ございませ。

9 ページでございませが、宿主との差異について検討が行われてございませ、これは非
組換えアルファルファとの間で主要構成成分、あるいはアミノ酸組成を比べることによ
って問題が起きていないか。

あるいは先ほど申し上げたような、問題となるような成分が増えているようなことはな
いかということも評価をございませ、これも従来品種とほぼ同等の値であったという
評価になっているわけございませ。

これらの評価に基づきまして、10 ページの IV のところございませが、『遺伝子組換
えアルファルファ「ラウンドアップ・レディー・アルファルファ J101 系統及び J163 系統」

については、「遺伝子組換え食品(種子植物)の安全性評価基準」に基づき評価した結果、ヒトの健康を損うおそれはないものと判断された』ということになっておりまして、本日、お許しいただければ、本日より意見・情報の募集に入らせていただきたいと思いますというものでございます。

よろしく願いいたします。

寺田委員長 ただいまの説明に関しまして、コメント、あるいは御意見ありますでしょうか。

よろしいですか。

それでは、本件につきましては、意見・情報の募集手続に入ることにいたします。どうもありがとうございました。

それでは、次の議題に入らせていただきます。

「平成 17 年度食品安全委員会運営計画について」、企画専門調査会において、その審議が行われましたので、担当委員の寺尾委員長代理から報告をお願いいたします。

寺尾委員 それでは、報告申し上げます。

企画専門調査会では、2月18日に第9回の会合が開かれまして、本日の資料3にありますとおり、平成17年度食品安全委員会の運営計画案、これにつきまして、審議をいたしました。審議の内容の詳細につきましては、事務局から報告いたしますので、よろしくお願いいたします。

小木津総務課長 それでは、お手元の資料3に基づきまして、御説明申し上げます。

資料3の表紙に書いてありますように、2月18日の企画専門調査会第9回会合において、原案一部修正の上、御了承いただきまして、これから御説明申し上げます運営計画案がまとまりましたので、御説明させていただきます。

1枚めくっていただきまして、1ページでございます。平成17年度の運営計画案につきましても、構成は16年度の運営計画と同じ形式になっております。

まず第1でございますが、重点事項について掲げてございます。2のところを見ていただきますと、5つほど重点事項を掲げております。

1つ目が、「委員会及び各専門調査会の計画的かつ効率的な運営をより一層推進する」という項目でございます。これは第2の委員会の運営全般に関することでございます。

2つ目が自ら評価、あるいは評価技術研究を開始するなど、委員会の主体的な取組のさらなる推進を諮るという点でございます。これは第3の食品健康影響評価の実施の方に関わります。

その下でございますが、「リスクコミュニケーションの推進を図るための手法の開発」でございます。これは第4のリスクコミュニケーションに関わることでございます。

その下も同じでございますが、「国民に対する正確でわかりやすい情報の迅速かつ適切な提供をより一層推進する」ということを掲げております。

最後でございますが、「国内外の食品の安全性の確保に関する情報の蓄積・整理を進める」ということでございますが、これは第6の情報の関係に掲げられている事柄でございます。順に御説明をさせていただきます。

まず「第2 委員会の運営全般」についてでございます。

委員会の会合は原則として毎週木曜日14時からということで17年度も開催をするということを掲げております。その下でございますが、「企画専門調査会の開催」。委員会の運営全般について、幅広い観点から定期的に点検し、改善提案を行えるようにするために、この下に書いてありますように、平成17年度中に6回開催するという計画になってございます。

2ページ、「③リスクコミュニケーション専門調査会の開催」でございます。効果的なリスクコミュニケーションの推進を図るための手法の開発、あるいは委員会が開催した意見交換会の評価について調査審議するということでございまして、おおむね1、2ヶ月ごとに開催するという計画になってございます。

「④緊急時対応専門調査会」。現在、食中毒に関する個別の緊急時対応マニュアルの策定の作業をしておりますが、この策定後おおむね1、2ヶ月ごとに他の危害要因に対する個別緊急時対応マニュアルの検討を行うという計画になっております。

「⑤食品健康影響評価に関する専門調査会の開催」、危害要因ごとのものでございまして、これは必要に応じ随時開催するという計画になっております。

「2 平成16年度食品安全委員会運営状況報告書」の作成を5月～6月ごろ、「平成18年度食品安全委員会委員運営計画の作成」、これが2月～3月ごろに予定されております。

3ページ「第3 食品健康影響評価の実施」でございますが、ガイドラインの策定ということでございまして、危害要因ごとの食品健康影響評価に関するガイドライン、具体的な策定スケジュールをとりまとめた上で計画的に策定するとさせていただいております。例として食中毒の原因、微生物に係る評価ガイドライン、これは自ら評価の対象になっておりますが、これを17年度を目途に策定する。

また、遺伝子組換え微生物を利用して製造された食品の安全性評価基準についての策定

作業を記しております。

その下でございますが、自ら食品健康影響評価を行う案件の検討でございますが、おおむね6ヶ月ごとに企画専門調査会での審議検討を踏まえた上で決定するということを書いてございます。

その下でございますが、リスク管理機関から要請があった案件でございますが、16年度までに要請があった案件については、17年度中に評価結果を取りまとめられるように努めるということを書いてございます。

4ページ「4 食品健康影響評価の結果に基づく施策の実施状況の調査」ということでございます。16年度の実績と同じように17年度におきましても、2回実態調査を行う。そして、その評価結果につきまして、御報告をするということになっております。

その下の5でございますが、これは新規の予算で認められたものの実施でございます。「食品健康影響評価技術研究の推進」。テーマ設定型の競争的研究資金の制度導入を受けまして、その研究を開始したいということでございます。

その下「第4 リスクコミュニケーションの促進」でございます。

現在、リスクコミュニケーション専門調査会において効果的なリスクコミュニケーションの推進を図るための手法等の検討が行われているところでございますが、これらを踏まえて、17年度におきましても、関係府省と連携して全国各地で意見交換会を30回程度開催する。

その下の方でございますが、「地方公共団体との共催による意見交換会を10回程度実施する」ということを掲げてございます。

5ページ、2でございます。9月に「全国食品安全連絡会議の開催」をする。

「3 食品安全モニターの活動」では、470名の方に御依頼いたしまして、活動していただくということを書いております。

その下の4でございますが、これにつきましては、原案については、企画専門調査会で議論が行われまして、これから申し上げるような内容に修正されております。

まず「国民に対し、正確でわかりやすい情報を迅速かつ適切に提供するため、国民の関心や提供した情報の理解・普及の状況を把握しつつ、ホームページの充実や季刊誌等の発行に努めるとともに、食の安全ダイヤルを通じた一般消費者からの相談や問合せについての対応を引き続き行う。

また、BSE等国民の関心が高いテーマについて、正確でわかりやすい情報の発信に努める。特に、一般国民に対する報道の重要性を踏まえ、マスメディア関係者との間で定期

的に意見交換を行うことなどにより、適時適切な情報の提供に努める」という内容になってございます。

「5 リスクコミュニケーションに係る事務の調整」でございます。リスクコミュニケーション担当者会議等の開催により実施していくということでございます。

続きまして、6ページ「第5 緊急の事態への対処」でございます。

1つ目が食品安全関係府省食中毒緊急時対応マニュアルの策定をしていくということでございます。これを4月を目途に実施していく。

また、食品安全委員会における食中毒緊急時対応マニュアル、これを4月中にまとめていくということを計画しております。

その下ですが、「3 他の危害要因に関する個別の緊急時対応マニュアルの検討・策定」ということでございます。

「第6 食品の安全性の確保に関する情報の収集、整理及び活用」でございます。これにつきましては、食品安全総合情報システム、これを平成16年度から3カ年で整備するというになっておりますが、今年度は特に関係機関との相互の連携のための共有情報システムを構築していく。

7ページにまいります。併せて食品安全モニターなどからの情報のデータベース化を図る。この2つを柱に手順を踏んで整備していきたいと考えておりまして、その計画を載せております。

その下でございますが、「2 国際会議等への参加」を掲げてございます。

「第7 食品の安全性の確保に関する調査」。これは16年度から引き続き実施する中身でございますが、①が、情報の収集・整理・分析に関する調査。

②が、毒性試験データ等の収集。

③が、市販されている食品等の安全性の実態調査。

④が、毒性発現メカニズムの解析、危害の分析手法の確立等の調査。

⑤が、欧米諸国等におけるリスクコミュニケーションの最新の事例等についての調査。

こういった調査を実施していくという計画になっております。

以上でございます。

寺田委員長 どうもありがとうございました。ただいまの説明に関しまして、何か御質問などございますか。

本間委員 第5番ですが、「緊急の事態への対応」ということで、マニュアルをたくさんおつくりになるということですが、これはマニュアルをつくって、それから先は、こう

いうものは、実際には何かしておかないと、いざというときには塀の中から出てこないということになってしまうんじゃないか。これから先どうされるのか。何かお考え、いかがでしょうか。

小木津総務課長 マニュアルをつくりまして、当面は食中毒というテーマに絞ってつくっていかうということになっておりますが、より具体的な事例に即してどういうふうな手順で委員会、あるいは関係省庁と連携をしていくべきかということを整理したものでございますので、できるだけこれを関係者で情報を共有して、具体的に更に気づいた点があればそれを改良していくという手順が必要ではないかと考えております。

併せてそういったマニュアルを手始めに、他の危害要因についてつくるとなるとどのような点が付け加わってくるのか。この辺り、緊急時対応専門調査会を中心に御議論いただきまして、具体的に役立つようなマニュアルを策定していきたいと考えております。

本間委員 要するに、関係する機関のネットワークを明確にするという感じですか。

小木津総務課長 はい。

本間委員 そうすると、実際に緊急事態が起こったときの立ち上げに関して、特段の練習も何も必要ないという緊急時の対応マニュアルですね。

小木津総務課長 そこは特に具体的な例を使ってやることですので、初動の対応とかいった辺りについては、かなりきめ細かく議論をしていかなければならないんじゃないかと考えています。

杉浦情報・緊急時対応課長 緊急時対応マニュアルについては、危害別ではないものについては、今年度策定いたしまして、今、総務課長から説明ございましたように、危害要因別ということで、現在、食中毒緊急時対応マニュアルを策定中ですけれども、こういったものについて、実際に備えてシミュレーションを行っていくということが1つの課題になっておりますので、今後、適当な機会を見つけてそういったこともやっていきたいと考えております。

本間委員 了解いたしました。私、何か1つの例をとりあげシミュレーションをやっておくというか、それは必要ではないかと考えております。

寺田委員長 私もこれは何回も何回も言っているんですけども、緊急時対応専門調査会のときにも、その席で言ったんですけども、食品安全基本法の中では委員会の緊急時対応に関する役割というのは何も書いていないんです。それは基本的事項の中には書いてありますけれども、法律そのものの中には、例えばリスクコミュニケーションは評価に関してはする。また、リスクコミュニケーションの調整はするというふうな役割の明示をちゃ

んとされているわけです。

それは当然のことではあります。大変難しいところで、緊急時には管理が主に出ますし、そのときにやる方は医師会の方とか、保健所、感染症研究所の人で、どこかで集団中毒が発生します。情報が入り対処します。このマニュアルができたなら食品安全委員会にまず報告するんですかということになります。今までのルートですと、医師会から保健所へ行って、保健所から県の衛生部へ行って、衛生部から厚生労働省へ通知するというルートがきちっとあるわけです。それとは別個にこっちにつくるんですかという問題にまります。そういう誤解を招きます。このところの役割がきちっと書いていないからこそ、できることとできないこと、委員会がやることをきちっとこのマニュアルの中で書いていただければ、変な誤解を与えなくて済むんだろうと思います。最初この委員会に来たときからそれを言っていました。ここは緊急時には扇の要のような役割をするんだという話を聞きました。要というのは非常に抽象的で、緊急時というのは非常に具体的な話ですから、これはどこかできちっとした形で、こうするんだということを書いておかないと、変にオーバーな評価をこの委員会に与えてもらって、ここはできもしないことをやるということになり、大変混乱を招くことになります。どの範囲内のことをするかということ含めて、食中毒を代表としまして、書いたもので、こういうことでやるんだと書いて頂ければ有難い。緊急時対応の初期はもともとの管理機関がやるんだということをしちつとするためにも必要じゃないかなと思っています。勿論、緊急時のシミュレーションもそうだと思います。そういうことなんで、ちょっと余計なことですけども。

何かございますか。

それでは、これはどうぞよろしく願いいたします。なかなかこの企画専門調査会というのは大事なところでございますので、いろいろとまたよろしく願います。

このことに関しましては、やはり大事なところでございますし、ほかの評価のところと同じように、広く国民から意見の募集を行った方がいいのではないかと考えています。その結果を踏まえまして、また、いろんな御意見がいただけたらと思いますので、食品安全委員会におきまして、最終的な決定ということにしたいと思います。よろしゅうございましょうか。

では、そのようにさせていただきます。

次に、食品安全モニターからの報告、平成 17 年 1 月分について、事務局から報告をお願いいたします。

藤本勸告広報課長 それでは、資料の 4 を御覧いただきたいと思います。1 月分ござ

いますけれども、食品安全モニターから 39 件の報告が全体でございました。B S E 関係が 10 件、食品衛生管理関係で 9 件といったようなことでございます。

例月に従いまして、食品安全委員会関係のものを中心に御説明したいと思います。

1 ページ目の下でございますけれども「リスクコミュニケーション関係」というところでございますが、リスクコミュニケーションの担い手としまして、消費生活アドバイザーの有効活用などを考えたらどうかといったような御指摘がございました。

食品安全委員会からのコメントでございますけれども、リスクコミュニケーションにつきましては、情報を共有し、それぞれの立場から意見を交換するような形で関係省庁がそれぞれ進めているということが書いてございますけれども、2 ページ目の方でございますが、実際の意見交換会などにおきまして、一般の消費者の方に加えまして、消費生活アドバイザーの方も含めて、地域の消費者と接する機会の多いさまざまな立場の方々にも参加していただいておりますという実態でございます。

こうした方々が消費者からの声を伝えていただく一方、正しい情報やさまざまな意見などについて、地域に還元していただくといったような取組みの中で、リスクコミュニケーションの促進を進めていただくということから、意見交換会などに更に積極的に参加していただくということを期待しておりますというようなコメントを整理してございます。

次に 3 ページで「B S E 関係」につきましては、先ほど申しましたように、全体で 10 件ほどございましたが、国内対策と言いますか、全頭検査の見直し等々について、慎重な対応を求めるといったような、あるいは早急な結論と答申の出し方を憂えるといったような御意見など、御指摘を 3 件ほどいただいております。

コメントとしましては、10 月 15 日に厚生労働省、農林水産省からリスク評価の要請を受け、これまでプリオン専門調査会において 5 回にわたる調査会を開催し、最新の科学的な知見を基に中立公正な立場から慎重に審議を進めているところですよというコメントを用意してございます。

そのほか、米国産の輸入再開に関連した御指摘が 6 件ほどございました。

4 ページの方では、国内で 14 頭の B S E 感染牛が確認されておりますけれども、ホルスタイン種だけに限られているというのはなぜかといったような御指摘がございます。

6 ページ、鳥インフルエンザの関係で 1 点御指摘がございました。京都での発生において感染者がいたということもありまして、国内での鳥インフルエンザ再流行防止のために万全の対策をとる趣旨でございます。

8 ページ、食品添加物の関係で、3 件ほどございました。そのうち 2 件が古米に用いら

れている食品添加物の関係。また、これまでもございましたけれども、パンに使用されている臭素酸カリウムの関係についての御指摘でございます。

10 ページでございますが、動物用医薬品の関係で、それらの使用基準の遵守、そのチェック体制についての御指摘がございました。

11 ページでございますけれども、肥料・飼料の関係ということで、生ごみに対する安全性についての御指摘がございました。

11 ページの下の方でございますけれども、「フグ肝特区」の関連で、慎重の上にも慎重に評価をお願いしたいという御指摘、御意見がございました。

こちらの方のコメントでございますけれども、特区の関係で、トラフグ肝に係る食品健康影響評価については、平成 17 年の 1 月 11 日付けで厚生労働省よりリスク評価の要請があったということで、1 月 31 日のかび毒・自然毒等専門調査会におきまして、提案者の佐賀県、あるいは嬉野町から説明を受け、質疑応答等を行ったところであるということになります。

今後、専門調査会におきまして、科学的知見に基づく客観的な立場から中立公正な評価について検討していくということにしておりますというコメントを用意してございます。

12 ページ以降でございますけれども、GM の関係で、作物の自生化についての調査についての御指摘がございました。

また、13 ページでは、ラップ類とかプラスチック容器の安全性についての指摘が 1 件ございました。

14 ページ、食品衛生関係ということで、全体で 9 件ございましたけれども、そのうち 4 件がノロウイルス関係の御指摘がございました。

17 ページ、「食品表示関係」では、3 件ほどございまして、原材料表示とか、賞味期限の関係の御指摘がございました。

19 ページ以降では、そのほか 7 件ございましたけれども、トレーサビリティの関係等々の御指摘でございます。

以上が 1 月分のモニターからの報告の内容でございます。

寺田委員長 どうもありがとうございました。ただいまの説明に関しまして、何か御意見、質問などございますでしょうか。

これは直接関係ないんですが、食品安全モニターの方の募集はいつからですか。

藤本勸告広報部長 3 週間近く募集させていただきまして、今週の月曜日の 21 日の消印有効で締め切らせていただいております。集まり次第、また御報告したいと思います。

寺田委員長 食品安全モニターからの報告に関しましては、ございませんですね。

その他の議事ございますか。

小木津総務課長 特にございません。

寺田委員長 それでは、本日の委員会のすべての議事は終了いたしました。全般を通じて何か委員の先生からございますか。よろしゅうございますか。

それでは、食品安全委員会第83回会合を閉会いたします。次回の委員会の会合につきましては、3月3日木曜日14時から開催いたします。

また、28日月曜日、14時から「新開発専門調査会」が非公開で開催。

3月2日水曜日14時から「農薬専門調査会」が非公開で開催。

3日木曜日10時から「汚染物質専門調査会」が公開で開催を予定いたしておりますので、お知らせいたします。

また、本日、この同じ会場で15時から19時までの予定で「プリオン専門調査会」が開催される予定でございます。

それでは、今日は終わります。どうもありがとうございました。